

学 校 教 練

三中27回 所 秀 雄

京三中に入学してまず驚いたのは制服のズボンにポケットがないことだった。後（うしろ）にはあるが、左右の脇（わき）にはない。ポケットに手をいれているなどということは日本の将来を担う若者のすることではない、そういう時代の流れを表すものであったのだろう。

そういう流れは、「学校教練」という科目に端的に現れている。今の学生諸君には想像もつかないにちがいない。数学だの国語だの普通の科目の教師の部屋とは別の建物に一室があり、そこに学校教練の教師が居た。体操の教師も一緒だった。

その先生方のなつかしい姿が想い出される。「配属将校」という肩書きで松島少佐、五十嵐特務曹長、伊東特務曹長、いずれも陸軍の三人が居られた。同じ部屋に体操の教師である飯干、国府田の二人の先生が居られた。飯干先生キビシイことで有名だったが、なかなかの「名物男」で今も忘れない存在である。

「学校教練」というのは何をやるのか。一口でいえば、銃をかついで行進したり、戦争の真似事をしたりする。校庭の場合が多かったように記憶するが、校外に出たこともある。当時の日本は第二次世界大戦に突入してゆく過程にあったから、こういう科目があっても誰も疑いを抱く者はいなかった。そして言われるがままに「教練」に励んだのである。

想い起せば、学校が変わるごとに日本は戦争に突入していった。文字通り『軍国主義』の流れの中で学生生活を送ったことになる。

京三中在学中（一九三一年・昭和六年九月）「満洲事変」

三高在学中（一九三七年・昭和十二年七月）「支那事変」

東大在学中（一九四一年・昭和十六年十二月）「大東亜戦争」

「」内の名称はすべて当時の日本での呼称である。今日では別の呼称であることは周知の通り。私の年次は、太平洋戦争が始まったため大学は三ヶ月くり上げて十二月に卒業することになった。くり上げ卒業や学徒動員のはじまりであった。

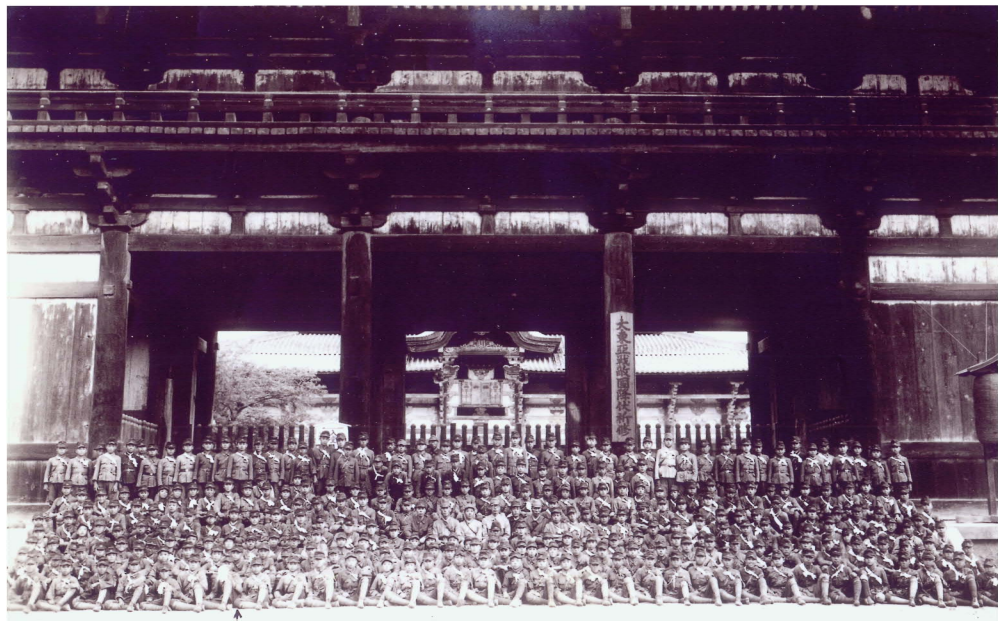
今の人は戦争を知らないとよく言われる。戦争にのめり込んでいく時代に生き、実際に戦争に行ったり、空襲に会ったりした世代から見ればそういうことになる。自分のカラダでいやというほど体験しなければ分からないことだからである。

今私が住んでいる集落では、小学校の同級生が一人もいなく

なった。みんな戦争で亡くなってしまった。淋しい限りである。
そういう自分の体験から、どんな時代でも戦争で事が解決することはあり得ない、というのが私の結論である。日本国憲法の戦争放棄の定めは永遠の真理に沿うものであると私は思う。



銃剣道の練習 ●



教練の一環として奈良まで徹夜行軍。上級生は武装して下級生は砂袋を背負って 40 キロを歩いた。
写真は終点東大寺前での記念撮影。二年生。(昭和 18 年 8 月)